

## 地域振興を目標とした地質観光情報の開発と利用の試み - 茨城ジオパーク設立を目指して -

### Attempt to develop and utilize geological information aiming at economic development- Aiming at establishment of Geopark-

# 細井 淳 [1]; 滝本 春南 [1]; 岡本 高幸 [1]; 伊藤 太久 [1]; 松原 典孝 [1]; 茨城大学地質情報活用プロジェクト 松原 典孝 [2]  
# Jun Hosoi[1]; Haruna Takimoto[1]; Takayuki Okamoto[1]; Taku Ito[1]; Noritaka Matsubara[1]; Matsubara Noritaka Ibaraki University geological information utilizing project team[2]

[1] 茨大・理・地球; [2] -

[1] Environmental Sciences,Ibaraki Univ.; [2] -

<http://geotourde.gozaru.jp/index.htm>

近年、グリーンツーリズムやエコツーリズム等、地域に根ざした観光資源や地域住民によるホスピタリティを求めた新しい観光が注目されてきている。旅行者は、その地域特有のことやものを体験し、学び、交流することを楽しむ。受け入れ側は、地域の資源を発見しそれを磨くとともに、訪れた人と交流し、共に楽しむ。このような観光の形が、現在主流になりつつある「ジオパーク」はこのような新しい観光を実現する上で画期的である。2008年12月25日、世界ジオパークネットワークに対し、洞爺湖有珠山、糸魚川、島原半島の3地域が日本で初めて登録を申請した。これにより、世界遺産に並ぶものとして注目を浴びている「ジオパーク」は、日本国内においても今後一層の盛り上がりを見せることは確実である。

自然、風土、文化、歴史、産業はそれらが根付いた土地、つまり「ジオ」に大きく左右されている。「ジオパーク」はその土地の地質的・地理的資源とそれに育まれてきたものすべてを地域振興の資源にしようとするもので画期的である。さらに、資源となるべき地質・地理的な材料は地球上どこにでも存在し、今まで一般的な観光資源を持っていなかった地域でも豊かな自然とその上で育まれた文化を資源としてジオパークを実現することが可能である。一方、従来すでに観光資源のあった地域においても、ジオツーリズムなどを通して、それを豊かな自然とリンクすることにより総合的な観光開発ができる。

文化的資源等と比べ、地質的・地理的資源は素の状態では元来難解なものである。ジオサイトとしてアピールするには、旅行者が楽しめるよう、それら資源を磨き、分かりやすくしなければならない。さらに、ジオパークの主役は地域住民である。そのため、今まで全く地学に触れたことのない一般市民にも、その地域の地質を理解し、親しみを持ってもらうと同時に、その重要性を理解してもらう必要がある。本プロジェクトでは、地質情報を観光情報に利用できるようなやさしくかみくだき、それをういてジオツーリズムのモデルコースを作成した。

モデルコースは茨城県内の「筑波山」、「霞ヶ浦」、「大子袋田」、「水戸・千波湖」、「五浦海岸」、「平磯海岸」の6箇所とした。これらの地域はジオサイトとして有用な資源に恵まれているのみならず、従来より観光地として観光旅行者が訪れておりモデルコースとして最適である。本プロジェクトではまず、ジオツーリズムの手段・対象者を設定した。その後、コース毎に最適と思われる地質的・地理的資料（露頭や地形等）を選定、さらにコース近辺の文化的資料等の観光資源を取り入れた。これらの情報をもとに「地質観光マップ」を作成、地域の市や町、観光拠点や市民団体等へ配布を依頼した。「地質観光マップ」はB4両面印刷とし、その内容は極力分かりやすくすると共にイラストを利用するなどして一般の方が親しみやすいようにした。さらに、地域の成り立ちのストーリーを入れ、見学したサイトとリンクさせることにより理解しやすいようにした。「地質観光マップ」にはコピキタス技術も取り入れ、「地質観光マップ」に記載しきれない情報をQRコードから携帯電話にて読み込めるようにした。携帯サイトは階層化してあり、利用者の興味に応じてより詳細な内容を読めるようにした。これにより、ガイドがいなくても観光旅行者が独自に「地質観光マップ」を持ってジオサイトを巡り、楽しめるようにした。

今回の試みで、地質情報を観光情報へ変換する事に成功した。観光情報に変換した後の地質情報は露頭毎にWebを作成してあり、単独でも応用可能なため、ジオツーリズムや観光ツアーの趣旨に合わせたコース作りが可能である。今回の手法では案内の看板等を改めて設ける必要がないので低予算で済む。また景観や地形条件等により看板が立てられない場所でも観光スポット化することが可能である。コースをある程度設定してあるので、観光にストーリー性を持たせることも可能であり利用者にとっても分かりやすい。さらに同様の手法は他地域でも応用可能であり、今後の地質情報の観光資源化に期待できる。地域住民が「地質観光マップ」を目にすることで地域の風土を再発見し、地学を利用した地域振興に協力してくれることも期待できる。

本プロジェクトの推進に当たって、株式会社サイボックスには技術面で全面的に協力いただいた。また、茨城大学社会連携事業会からは資金の援助をいただいた。